

みこひだこ

旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会
〒140-0001 品川区北品川2-2-10 TEL 03-3472-4772 FAX 03-3472-4770
URL <http://www.japan-city.com/sina/> E-mail: syukuba@cts.ne.jp

品川・ジュネーヴ「友好の花時計」お披露目フェスティバル

平成15年4月19日

品川シーサイドフォレスト

折りたたみイスですらフッ飛ぶ風の中、ジュネーヴフォレストの花時計の前で式典は行われました。まず式典に先立って品川寺の仲田順英後住より、パリの万博に出品されて行方不明になった品川寺の梵鐘が、大正時代にジュネーヴ市のアリアナ博物館にあることがわかり、ジュネーヴ市そして関係者の努力により昭和5年に里帰りをはしたました。そのお礼として15年ほど前、品川寺から鐘のレプリカを贈呈、それが縁で品川とジュネーヴ市との友好関係が始まり、その10周年を記念してジュネーヴ平和通りの名前のついた通りに、ジュネーヴより贈られた針をつけた花時計が設置されることになった。と今までのいきさつの説明がありました。

式典のはじめに協議会会長の堀江より「友好の証として花時計が刻一刻と時を刻むことでしょう。」ジュネーヴ側からはスイス大使 ジャン・ジャック・ルヴェルダン氏より「長い歴史を持つ2つの町のお付き合いは始まったばかりですが、きっと長いお付き合いになるとおもいます。」と挨拶がありました。

品川区区長・高橋久二氏、ジュネーヴ品川友好協議会会長 アラン・ドウクローザー氏、品川寺住職

スイスと日本の国旗がデザインされた花時計の前で、式典は行われました。



品川女子学院吹奏樂部による華やかな演奏が商店街に鳴り響きました。



仲田順和氏にスピーチをいただいたあと、品川女子学院吹奏樂部のファンファーレ、そしてテープカットがおこなわれました。

その後品川シーサイドフォレストからジュネーヴ平和通りを通って品川寺までパレードをおこないました。品川寺の法螺貝を先導として、東海中学校の生徒有志にジュネーヴ市と品川区の旗を持ってもらい、区長をはじめ、大使、ジュネーヴ市からの来賓、議員、近隣の町会長、校長、交通安全協会、防犯協会、友好協会の代表、その後ろに品川女子学院の吹奏樂部という形です。短い距離でしたが素晴らしい演奏でした。

品川寺の中でも演奏が行われ、特に「品川宿半纏」を着た女子学院の生徒数人が前で踊った吹奏樂での「八木節」は大好評でした。

夜にはホテルラフォーレ東京（御殿山）にて歓迎会を行いました。堀江会長のあいさつのあと、公使ペーター・ライハルト氏が乾杯。壇上では「オールドフューチャー」を合言葉に品川で活動を始めているM&Mプロダクションのアーティストの歌が披露されたり、「カッポレ」を大橋氏が踊ったりと盛り沢山で楽しいひと時でした。

（事務局次長 木村眞基）



ホテルラフォーレ東京にて行われた歓迎会では、ジュネーヴの方々もリラックスした様子で、会話を楽しんでおられました。



特定非營利活動法人

歴史の道東海道宿駅会議設立について

日時：平成15年2月5日（水）

場所：土山宿 お茶のみホール

校文房器

歴史の道、美術道は、日本の歴史的発展に大きな役割を果たしてきました。今日街道のまことに生きる私たちには、交通や情報による我々の生活に根ざした文化遺産として訊きと受け継がれ、「道」が驚案をもたらし地域づくりの根幹をなす歴史的な宝物であります。

昭和63年(1988)に土山祭り会場に第1回のシンポジウムが開催され、東海道の宿駅伝馬制度の学習を行ない、高川町、駿河町と連絡各駅をめぐり回り、開催されました。平成8年(1996)木曽川大会で選進会制度を発表し、本年度は第15回目を木曽川で開催いたしました。このように街選進史文化を大切に学習や交流を探めながら、土山祭り会場をつなぐ連絡各駅と共にまちづくりの推進に努めてきたところです。

しかしながら、今日を取り巻く環境は経済不況による空洞化、少子高齢化や雇用問題全般的な社会問題となっており、町づくりについてもその進捗に大変意識しているところがあります。特に地方においての出町村合併と地方分権の推進による広域化の波は地方文化の継承や、地域社会の取り組みを逼迫させられるがあると危惧しています。三連休会議の運営についても同様であり基础设施に対する懸念が大きくなっています。

私たちは、新たに特定非営利活動法人として歴史の通東海道沿駅会議を設立し、心ある皆様とともに組織を確立して、現東海道シンポジウム連絡会議を発展的にリニューアル! 更に取り組みを深めなくては!

土山館を会場にした第1回のシンポジウムとはまさに田東市川原町にあります。この会議の設立のきっかけであります。土山館前町長松山正巳氏の呼びかけに牧野藤式夫氏と現役劇作家藤原英氏がシンポジウムに参加、感想を述べたところが田川市で開催される約



特定非営利活動法人「歴史の道東海道宿駅会議」の理事長である松山正巳氏とともに、文化庁長官河合隼雄氏に東海道400年祭の報告をする岡田新三会長。

よく集まつた。今声であがめらる早14日の日はがちました。その間、東海道400番駅でひびきシゾジムを申する者体が各所に現れ、おないに大いに表現を発展。また復活、第1回アーティストによる大きな表現をあげてきました。しかし、ながら40年駆け過ぎて、行政の熱がさめたり、各媒体も曲がり角をむかえたりと、意の如く事をかえています。そこで高川井も起きた一人として新潟芸能同人会、歴史の道東西五箇敷会議に参じ、連絡会議の実質的リニョーアルに取り組んだりと考えます。現在は前理事として蛭田新三氏、豊田会議の会員として、運営委員の有志が個人会員としてう labore で活動しています。

(交流參與指標 請待函)

タイ バンコク視察

昨年11月15日(金)～18日(火)まで、品川区窓店街連合会員の皆さん達と、15日夜到着の便にて、タイ・バンコクに視察に行ってきました(有志で集まり自費で参加)。

今度視察のほか、出かける直前まで、バンコクで「日本人まつり」を計画している日本人企画関係者と打合せを行なうながら、出来れば当月品川区西麻布代表としてイベントに参加するつもりで動いていたのですが、イベント参加については残念ながら今度は見送りとなってしまいま

到了着した翌朝から、超大型ショッピングセンターやクロントーイ市場、街中の露台、ナイトバザール、主要道路を全面通行止めにして行っている大きなイベントに至るまで、精力的に視察してきました。今回の視察で感じたことはバンコクも日本同様不景気であるということ、しかし

い、日本ではじめようがにれのものにもかかわらず、追加ショッピングセンターを接するまで、市街や商店、一起の商店街は立派に共存共栄していくことにとても驚きを感じました。日本では大手店の出店に伴い商店街が元気をなくしているところを見多く見かけます。しかしパンコの場合は、品川のようにならぬでまとめてまとめて作って行くこという言葉のではなく、それぞれが勝手店舗を出して営業しているという感じではありますが、「上野」がアーバンでも元気でパワフルに発展してきました。宿館がパワフルにそれぞれ逞張ることこそ、まことに経済を兴すための底堅のなかもれません。今後、なんだかんだ人の進出や元気をいたたいたうえで、日本に立ち戻った空気や、あるいはからだパワフルに、迎やすめづくりをやっていけば、きっと好景気やうちの気分も引き寄せられるのではないかと感じました。

不景気を人のせいにしてしょぼくれているうちは、きっといつまでも店やまちに話題は戻って来ないでしょう。自らが店やまちに対して何が出来るか?を考え、率先して行動することが、まちに話題を取り戻すことにつながるのではないかでしょうか?

まちづくり協議会の歩み その1

初代・佐藤武夫会長を偲んで

昨日、早朝14年12月28日、黙蒼武尊が亡くなるのをたのむ事を書いた。大蛇ショックを受けた。翌日暴風に吹き、当夜、朝から嵐のまわりの精神に明け暮れ。爆風でから窓戸に入って、身を保護したくて困らなかったのを感じた。成らしくいはれ生きをとばされたくなとの感覚を感じて、命を含むながら思はずにはいられなかつた。そして山伏のまぢうり油絵を立ち上げるまでの事。今日はそれだけの別な作風立ちとれる歌ひのある活きづくりをした。本当によくやってきましたね、との想いが走る始めるよござる。

馬鹿とは、山川地域で構つたクレタントの辺境であつた品川御内宿詫問の1987年（昭和62年）当時の御内事、御内警の際、いつも叱咤されながら人々について教えて下さった高木先輩であった。当時の大庭品川御内宿詫問の辯慶屋にて、今豆の「まちづき通り屋舗」の窓店街の正面入り口に構成され、駆除される前は扇形ババーは各会員の拠点または拠点が営んでいた。そこでいつも出でてくる面影は、昭和60年代（1985年～）に入り、我々周辺地域の開拓者が豊かな生涯を実現して行き、その顔面が耳に及ぶ、目にした時に、また御内を心配して申だる辺境でのままにまことに良いのかという事であった。**■品川町まちづき通り屋舗の誕生**

当時、一つ一つの商店街が同じ向で取り扱いをやめたり。別イバンを手掛ける事務所、北の天王寺駅大森、以外、全くなくなった場所である。(大手筋はありますましたね)、たまには西端が本屋町通の川原町の役員をもつていた間島から、當時市議会議事長、小畠義明氏そして品川区川原町役員(後、地域活性議員)の亀田光辰とお会いする機会も多かった。地域へ今後について話をしていた結果、大切な事実が引き出されたのです。

地域活性主義者を持つに当り専門知識のビジョンを提示するならば、行政品川区としても協力は惜しまない、また会議として最も大切に視野をもつての言葉を書き、在郷連盟に報告、各門内会の理事会(横浜・川辺・港北・港南各門内の代表会中心)にかけ、その後各地区で巡回していくなど、その実現性から一度各商店街の役員も交えて勉強会や勉強会を行なったのです。

より、この場所を近代ゴジラ本丸上陸の地として少しでも発信し、世界中のゴジラファンの聖地として認知させて世界観形成の一環として街を活性化して行こううのである。(ヨコ!アラ!ヨコはいい!)具体的には、在工事の八丁堀アーバンベースの上にゴジラの等身大首からその部分を、品川駅北口開発が行われている直通道路の公園品川(区部分)に等身大の尻尾の先端部を設置しうると言うのだ。(すばんげ!)しかし、しかし、僕大部分の頭部は地盤に溶けているという設定なのではないだ(あっ、そ、ま、そ、な、等身大も無いも無い)、そしてブレートにはゴジラのプロフィールや初登場の月日、この戦闘のテーマである假面戦車の折りを記した品川の御幸新井町品川市立公民館を記す。

ゴジラの像(言ふた方が良いかも)が出現する、つまりからくりからくりが現れる、かわいいから

は既に決意を固めにしておいた。

当時、品川市企画部総務課を通じて「旧東海道33次宿場シングルズ」の一部「第一回 豊島高尾山土産で作られるるの旅があり、地図から花見坂風景。品川区からは辻信子企画課副監修事務官が、麾下課長室からは小島義明事務長が参加され、その他の役員を兼ねて「第一回懇親会」が昭和3年(1968年)8月29日に品川ビーチハウス3階講堂で行われた。

9月26日「第二回懇親会」が同会議室で開催され、尾瀬7度会員が集まり、然後シングルズの報告を受けるとともに地域活性化について鑑賞し、会員会の結成について意見の一致を得て、浜川町より追込義典(現・追込議員の当初の名前)代議院庶務課・品川区議会企画室長としてこの日決定した。なお、事務局を置き、その構成も併せて決定した。★次回に続く

(文/小島義明)

らあつという間に黒山の人だからが出来てしまい、警察より中止の命令が出たとか、巨大なゴジラ型のバルーンを膨らました所、周囲の高速道路が瞬く間に見物渋滞を引き起こして、やはり即刻中止に追い込まれた等々、ゴジラ復活のイベントの伝説は枚挙にいとま無いのである。またメンテナンスや、版権のある東宝側の考えもあって領控している模様。

でも見てて下さい。発案者は徒手空拳の品川磯会なる者（横丁の看板や虚空蔵の大祭などでお馴染みですね）ですが、品川区やしながわ観光協会・周辺ホテルや企業・地元町会や商店会、そして勿論この旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会を巻き込み、一致協力して夢の実現に向か、最後まであきらめずに粘り強く交渉をして行きました。

以上、品川磯会の一メンバーである、篠原がお伝えしました。
(新宿お休み処副館長 篠原典男)

これからしながわ観光

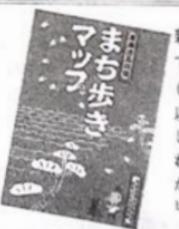
これからのしながわの観光について記事を書いて！と依頼され、この記事を書いているが、振り返ってみると、まちづくり協議会発足当時は、品川宿周辺の観光なんてほとんど想い当たらなかったようだ。當時、若手の一員だった私も、「品川の良いところは？」と質問され、「おせっかいなほど人懐っこくて人情が厚く、来街者を暖かくもてなす気質、いわゆる宿場気質を持った人間が、昔から暮らしている所」などと言う来街者には見えにくい、抽象的な答えを言っていた。そして、協議会会員達で何度も何度も話し合い、まちの事業計画書が完成。それに沿って、品川宿周辺を訪ねて下さる方々を、暖かく迎え入れる気持ちを表すために、空き店舗対策を利用して「新宿お休み処」が開館した。また、品川宿周辺の景色は、まちの住人にとて余りにも当たり前の景色として溶け込んでいたため、来街者に見せる観光のネタになるものとして思い浮かばなかった。そんな中、何度も品川宿に訪れた人達を案内しているうちに、「今でも路地の真ん中に井戸が残っている！」、「あの銅版建築はすごい！」、「このレンガの堀は貴重ですよ！」とか言われ、初めて、自分分がすごいまちに生まれ育ったのだと気付かせていただいた。確かに宿場気質を持った人間が、まだまだ暮らしているまちというのは、品川宿の観光にとって今でも大きな部分を占めると思うし、歴史の街品川宿は寺社や路地、井戸など、所々来街者に見ていただける面影をとどめている。

そして一転、周りに目をやると品川駅東口の再開発、秋には品川新駅に新幹線が発着、そして品川シーサイドの開発、大崎再開発等々品川宿周辺を取り巻く環境は、本当に大きく変化している。多分出来上がった当初はどこも注目を浴びると思う。しかし、新しく出来上るまちの顔が、皆同じに見えてしまうのは自分だけであろうか？その後また違う地域に新しい施設ができると、お客様は流れていってしまう。今までの新しい開発を見ていると、そんな繰り返しをしているようにしか思えない。今お台場

地域でレトロ商店街や、昔風の温泉施設ができて話題になっているが、企業がそんなに莫大な予算をかけて無理やり昔の箱物を作らなくても（そんな作り物でも昔を求める人が多くいるということだと思う）、それに近い方がこのまちは今でも残っているし、新幹線の駅から歩いて5分程度の所に、水辺があり、屋形舟に乗って、伝統芸能を見ながら風流を楽しめる地域は日本全国を探しても他に無い。こんな素晴らしい地域特性を生かさない手はないと考えている。自分自身の考えを述べれば、なにも、昔の情緒だけにこだわる必要は無いとも思う。ハッピーハウスが昭和29年のゴジラの映画で、初めて本上陸した地点として、マニアには広く知られているが、そこに初上陸の聖地の証として、ゴジラの像が建っていても良いと思うし、水辺には、屋形舟だけでなく、もっと水に親しめるよう、カッターボートやシーカヤック等が乗れるようにしても良い。また、アジアアンチックな水上マーケットやバージ船（砂利舟）を改造したバーや、音楽を聴ける船・演劇や伝統芸能を見られる船を並べるのも楽しいのではないかと考えている。そして何よりも、そんなしながわに興味を持ってくれた若者が安い賃貸料で出店できる、一坪マーケットのようなものもできたら面白い、と言うように自分で夢と言葉を妄想がどんどん広がっていく。

このように古き良き物は大事に残しつつ、昔と新しい感覚が渾然一体となった、ある意味なんでもありのようない形、しながわと言葉のオリジナルな顔をつくることが、このまちの新しい都市型観光なのではなかろうか。品川と言葉のまちは、江戸の宿場町よりはるか以前の品川港と呼ばれていた頃から、時代の流れとともに少しづつ形を変えながらずっと生き残って来たまちだと思う。そしてそこに住み続けている品川気質を持った品川っ子を中心に、新しく品川に住んだ人達を巻き込みながら、一緒に未来型の新しい都市型観光に十分対応していくける度量と、ポテンシャルを秘めたまちだと確信している。何年か後には、しながわが大きく化ける可能性を大いに秘めていると思う。沙留やお台場のように、企業が莫大な費用を投資して黙っていても人が集まるまちをつくってもらうではなく、品川宿周辺の住人達自身が考え、汗を流してまちをつくる事こそが孫子の代まで「俺達は品川に生まれ、住んでいるよ！」と胸を張って言えるまちを残してあげる、ということだと思っている。自分は旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会に、初期の頃から属して活動してきたが、これからも体が動くうちは協議会とともに走り続けたい、と思っている。

(まちづくり協議会 大越章光)



新しい「まちあるきマップ」
できました！

(2003.4.1改訂)

以前のものと表紙の色が変わりましたが、表紙の中でもうひとつ変わったところがあります。さて、何が変わったのでしょうか…
ヒント：あるモノの数が増えています。